

水鳥の羽音もさえてみなと江のあしの枯葉に夕風そふく 蘆 月

評曰、聲調逼古

霜かれの蘆の古葉に風さえて見るめ淋まき灘波江の浦  
折ふしてれしの伏戸となりにけり霜にかれ行く瀬々のむら蘆

評曰、至妙

### 觀楓會席上連歌

(雜報欄參照)

千早振あまの岩戸を押し分けて見れば神代の紅葉てりけり  
さえ渡る月もいつしかかたふきて面影のこす峯のもみち葉  
見る人もなき山里にもみち葉のにしきをさつゝ住む人もあり  
紅葉散る峰にも尾にも音たてゝなくや小鳥の聲もはえあり  
荒れ果てし賤か菴に立よれば人もあらしの紅葉散りしく  
うるはしき峯の紅葉散りぬども形身は残る木枯の聲  
鳥の音も煙の底にうつもれて夕日さひしき山の下庵  
くみかはず紅葉の酒のなりひさこ枝にかけれいとまあらめや  
夕まくれ鐘の音遠く音つれて歸りをいそぐ山れるまの風

### 同席上郎題

讀む文のしほりにせはや紅葉の一葉はかりはゆるせ山姫 溪 川

紅葉を折りてそ人にかたならなむ今日のまどゐの心ふかさを  
秋山の夕日うつろふもみち葉をたをるもをしくたをらぬをし  
今日はいさ錦きつゆもかへらまし見きやと問はん人のあるかに  
夕日影にはふ山への紅葉に春をうつまて小鳥なくなり

評曰、春をうつして一首の眼、おもしろし

もみち葉のあかき心を今日こゝにつとふ學ひの友にこそみれ

評曰、なんなし

其前夜の思ひを

いく度か夜半のあらしに寢覺まつ明日見ん菴の紅葉いかにと

評曰、秋の色を惜しむまことにいくの如し

雑歌

草菴紅葉

はらふへき人もあらしに紅葉散る柴の戸さしの秋の夕暮

評曰、感ふかし

擣衣

たがためにうつか砧のたへく音を聞ゆる小夜のねさめに

初霜

錦山

芝峰

奇熊

一心

山人

錦山

基紀